

アイデンティティの確立

牛越 恂 (新3回生)

私が岩手中学校に入学したのは昭和二〇年四月であるから、太平洋戦争の末期で本土がアメリカ機の空爆により大都市が焦土と化しており、盛岡も駅前が焼夷弾による大被害を受けた時代であり、学校も授業どころではなく、上級生は動員で工場に行き、私達下級生も滝沢の荒地や岩山の開墾作業に従事したり、校庭に疎開していた工場の機械を守るため、学校に泊まるという日々であった。

同年八月終戦となり、今までの価値観が一変する混乱の時代となり、その大きな渦の中でただ右往左往するだけであり、新憲法、教育制度の改革など目まぐるしく世の中が変化した時代が中学三年頃まで続いたので、私は中学時代の思い出といえば、予科練の服装をした上級生の説教と拳骨に怯えていたぐらいである。

高校一年になった頃は世の中も落ち着き、平静な心になり、教育活動も軌道にのり、高校の教科に芸能科(音楽、美術、書道)が設けられ、私は「字は下手だし絵も駄目だから」

という全く変な動機で音楽を選択したのであるが、これが私の人生を決定することになったのである。その年赴任した音大出身の生内義夫先生の第一回目の授業で、先生がピアノを弾きながら歌った曲の魅力的な音色と和音に、私は今まで経験したことのない背筋を強烈に走り抜ける感動を覚えたのである。

この感動が、私が大学で音楽を専攻し、音楽の教師として今日まで生活している動機となっているのであり、先生の授業は高いレベルであったが音楽の真髄に触れる内容であったことが更に勉強しようとする気持ちになった。先生は授業以外にもクラブ活動で八〇名にも及ぶ男声合唱団を組織し、名前をグリーククラブと称して校外の演奏会にも盛んに参加し、岩手の音楽界にセンセーションを巻き起こしたのである。

演奏曲も今日でも難曲といわれる曲を短期間で練習して次々に発表していたが、その練習は、先生のモットーである「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす」を実践し、日

曜、長期の休み無しであった。これは何も音楽ばかりでなく、ラグビー、水泳、陸上、体操、バスケット、アイスホッケーなども厳しい練習のもと優秀な成果をあげ、演劇、美術などもユニークな活動を行っていたので、今思えば岩手中高校のルネッサンス時代のよう
に考えられる。そして不思議なことには、運動部の練習が終わってから文化部で活動するなど文武両道に精進したものである。そしてこれらの活動は、やらせられるのではなく、指導者の情熱に食いつく自発性、自主性が基本にあったのである。

グリーククラブは更なる発展のため、岩手女子高校と合同の混声合唱の活動に入り、「岩手フィルハーモニックソサィティ」と称し、当時国語の水原一先生作詩、生内先生作曲の交声曲、岩手の三部作、岩手山、北上川、三陸海岸を次々に発表し、県芸術祭での発表、東北六県への生放送を行い、東北に「音楽の岩手高校あり」と評価され、岩手の音楽史に輝く存在となっている。先生は二年間で東京の音大に再入学されたが、以後も水原、生内両先生のコンビの大作、交声曲「平和」を発表したり活動が続いた。

私はこの音楽部の活動の中で、教師と生徒は全情熱でぶつかり合うことで燃焼し、や

がて心が純化することを学び、勉強面では自信を持つことができなかつたが、音楽部の活動の中での仲間、上級生、先生方、その他諸々との出会いが自分のアイデンティティが確立

したものと確信している。

この原稿を書き終わり、念のため五〇年史を見たならば、全く同じ内容であり、改めて自分の高校時代の精神形成に与えたものはこ

の音楽の活動だったのかと深く考え、また後に年誌などを書く機会があれば同じ内容になるのではないかと思うほど、音楽部における体験は鮮烈なものとして残っている。